江吏部集試注（十）

木戸裕子

（承前）、（九）は『鹿児島県立短期大学紀要』人文・社会科学篇第五十二号に掲載している。

凡例

一、底本は板本群書類従を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。

一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。

一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

内閣文庫（旧浅草文庫）本――（内）　山口県立図書館本――（山）
陽明文庫本――（陽）　祐徳稲荷本――（祐）
静嘉堂文庫本――（静）　神宮文庫本――（神）
国会図書館本――（国）　無窮会図書館本――（無）
東大図書館（E45　656）本――（東A）
東大図書館（旧南葵文庫）本――（東B）　岡山大図書館本――（岡）
島原松平文庫本――（島）　東北大図書館本――（東北）
京大図書館本――（京）　多和文庫本――（多）
賀茂別雷文庫本――（賀）　名古屋市立鶴舞中央図書館本――（鶴）
本朝文粋（新日本古典文学大系）――（粋）
本朝麗藻（校本本朝麗藻）――（麗）

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。

煙・烟　花・華　叢・菜　窓・牕など。

一、割注など小書の部分は〔　〕に入れて示した。

一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

前稿までの補遺及び訂正
小野泰央氏、北山円正氏、工藤重矩氏から、ご教示を頂きました。衷心よりお礼申し上げ、補遺・訂正として上げさせていただきます。

二十四　七言。九月尽日同賦送秋筆硯中応製一首

十四行目訓読　金飆に謝せられて耳に驚き
十六行目訓読　山に登ることを欲せず只巒策を文集の雲に案じ
十七行目訓読　水に臨むことを要せず只舟檝を詞江の浪に任す

二十五　初冬感興

◎東閣＝漢の丞相公孫弘が東閣を開いて賢人を招いた、いわゆる「漢相東閣」の故事を踏まえる。三「八月十五夜陪員外藤納言書閣同賦月照牖前竹」の「公孫弘曰」の語釈、七「七言。秋夜陪右親衛亜相亭子守庚申同賦秋情付露深」の「公孫弘之開東閣」の語釈参照。ここは内大臣の邸のこと。「漢書曰、公孫弘起徒歩、数十年至宰相封侯。於是起客館、開東閣、以延賢人、与参謀議。弘身食一肉脱粟之飯。故人賓客仰衣食、俸禄皆以給之、家無所余」〈『芸文類聚』巻六十三「居所部」館〉

（以上北山氏からのご教示による）

二十六　初冬与諸君談話

◎鵷鸞＝殿上人の唐名。〈『拾芥抄』〉

◎肥州＝ただし必ずしも守とは限らない。在京の官人なので権官かまたは文章生外国の可能性もある。

（以上工藤氏からのご教示による）

第八句訓読　鬢霜零落し思風遅し

◎思風＝詩文の思い、詩興。「思風発於胸臆　言泉流於脣歯（五臣注・思之発也。如風起激於胸臆）」〈『文選』巻十七「文賦」陸士衡〉「勅喚不広捜詞露於棘位之間　清選無私　抽思風於松喬之裏」〈『本朝続文粋』巻十「暮秋侍宴、同賦菊為花第一、各分一字応製」藤原義忠〉

（以上北山氏からのご教示による）

二十八　秋日遊般若寺同賦秋山似画図

◎先祖相伝之善地＝大江氏の祖、大江玉淵が仁和寺の側に般若寺を開いたことが『江都督願文集』巻三「仁和寺極楽院願文（般若寺願文）」に見え、同じ内容が必蓮本『仁和寺諸院家記』にも見える。それに続いて維時、匡房と相伝されていったことがわかる。「江家兆朕出自平城天皇、阿保親王。始祖参議音人卿、遂聚雪之業、登伐氷之班本。以平野霊社為氏族神。二男玉淵朝臣、長安城西仁和寺側、排松杉造堂舎。謂之般若寺。及中納言維時卿、近此蓮宇新造聚祠。即栄平野大神別為祭祀之地。自厥百有余年、弟子簀舎之昔、青衿之時、春秋礼尊常詣此社。地僻人稀煙嵐暗兮神如在。薫歇燼滅香火断兮仏独存。於是刀火刻胸梗縻垂涙矢曰、争於此地新建仁堂、抜済先祖於黄壌…」〈『江都督願文集』巻三「仁和寺極楽院願文（般若寺願文）」〉

（以上小野氏からの御教示による）

※本稿では巻上二十九番の詩及び詩序を取り扱う。

二十九　七言冬日登天台即事応員外藤納言教言〔八韻并序〕

天台奇秀甲天下山
名花異草非仏種不生
香象白牛唯法輪所転
衆山属其足巖扃有道
大湖在其前水鏡無私
開霧則見清顔
類周文之遇師父
渉海則聞浪迹
譏漢武之求神仙
至如夫
近白日而人難及
倚青天而鳥纔通
触石雲興旱天作霖雨之用
含玉木潤任土貢廊廟之材者也
若以此山比君子徳

天台奇秀　天下の山に甲たり
名花異草仏種に非ざれば生えず
香象白牛唯だ法輪の転ずる所
衆山其の足に属く　巖扃道有り
大湖其の前に在り　水鏡私無し
霧を開けば則ち清顔を見る
周文の師父に遇ふに類せり
海を渉れば則ち浪の迹を聞く
漢武の神仙を求むるを譏る
夫れ
白日に近づきて人及び難く
青天に倚りて鳥纔かに
通ずが如きに至りては
石に触れて雲興り
旱天に霖雨の用を作す
玉を含みて木潤ひ土に任せて
廊廟の材を貢す者也
若し此の山を以て
君子の徳に比ぶれば

員外藤納言近之矣
是以
同類相求登善根山
一心不退尋功徳院
所率者虎牙蟬冕
策逐日而景従
所談者鶴勒馬鳴
叩疑氷而響応
数往来于此場
誠有以矣
時也十月余閏
景物幽奇
納言尊閣命一儒生
吾有法門師友
已以道通交情
汝為翰林主人
宜以詩作仏事
匡衡避席垂涙曰
多年不遇知己徒老尼山之雪
今日被引善縁幸攀台嶽之雲

員外藤納言之に近し
是を以て
同類相求め善根の山に登り
一心退かず功徳の院を尋ぬ
率ゐる所の者は虎牙蟬冕
逐日に策ちて景のごとく従ひ
談ずる所の者は鶴勒馬鳴
疑氷を叩きて響きのごとく応ず
数〃此の場に往来す
誠に以有り
時や　十月余閏
景物幽奇なり
納言尊閣一儒生に命ず
吾に法門の師友有り
已に道を以て交情を通ず
汝翰林主人たり
宜しく詩を以て仏事を作せと
匡衡席を避け涙を垂れて曰く
多年知己に遇はず
徒らに尼山の雪に老いたり
今日善縁に引かれ幸ひに
台嶽の雲を攀づ

不敢辞死*況於死乎
若不記録謂*洛*無人云爾

相尋台嶺与雲参
来*此有時遇指南
進退谷深魂易惑*
升降山峻*力難堪
世途善悪経年見
隠*士寒温近日諳*
常欲掛冠縁母滞
未能晦迹向人慙
心為止*水唯観月
身是微塵不怕嵐
偶遇*攀*雲龍管*駕
幸聞*披霧鷲*台談
言詩*讃*仏風流冷
感法礼僧露味甘*

敢へて死を辞せず
況や詩に於いてをや
若し記録せざらば洛に
人なしと謂はれんと云ふこと爾り

台嶺を相尋ね雲とともに参り
此に来たるに時有りて指南に遇ふ
進退 谷深くして魂惑ひ易く
升降 山峻しくて力堪へ難し
世途の善悪 経年見
隠士の寒温 近日諳んず
常に冠を掛けることを欲すれども
母に縁りて滞り
未だ迹を晦ますこと
能はずして人に向かひて慙づ
心 止水為りて唯だ月を観る
身は是れ微塵なれど嵐を怕れず
偶たま遇ふ雲を攀づ龍管の駕
幸いに聞く霧を披く鷲台の談
詩を言ひ仏を讃すれば風流冷かに
法を感じ僧を礼して露味甘し

恩煦豈図兼二世
安知珠繫酔猶酣

恩煦豈に図らんや二世を兼ぬるを
安んぞ知らん珠繫酔ひて
猶酣なることを

【校　異】

1，奇—音（鶴）　2，甲—申（山）　3，山—ナシ（祐）　4，象—蒙［ミセケチシテ象ト傍書］（静）　5，法—香（京）　6，衆—泉（島、多）　7，山—ナシ（京）　8，足—定（鶴）　9，巌—岩（内）　10，扃—扁（鶴）　11，清—青（底本、諸本ニヨリ改ム）　12，求—ナシ（鶴）　13，夫—史［ミセケチシテ夫ト傍書］（内）　11，而—両［ミセケチシテ而ト傍書］（東A）　14，旱—早（静、島、祐）　15，雨—両（東A）　16，土—士（陽、鶴）　17，廟—庙（内、陽、静、東A、島、京、祐）—廣［廟乎ト傍書］（山、賀）—庙（鶴、多）　18，材—村（島）—林（山、神、賀）　19，藤—藤原［原ニミセケチ］（内）　20，尋—尊（陽）　21，策—ナシ［策ト傍書］（神）　22，馬—鳴［ミセケチシテ馬ト傍書］（神）　23，叩—ナシ（陽、京、祐、神、鶴）—ナシ［一字分アキ、脱字ト傍書］（山、賀）—呼［叩乎ト傍書］（内）　24，尊—導（内、島、多）　25，命—令（島、多）　26，已—己（無）　27，宜—宜（静、賀、鶴、多）　28，涙—渡（島、多）　29，曰—云（祐）—四（島）　30，遇—過（京、鶴）—過［遇与ト傍書］（神）　31，知—知知（陽、鶴）　32，己—已（東A、東B、京、祐）　33，攀—挙［ミセケチシテ攀ト傍書］（内）　34，死—

哉（京）　35，謂―ナシ（祐、鶴）―ナシ［脱字ト傍書］（山、賀）　36，洛―活（鶴）　37，来―ナシ（陽、祐、鶴）―ナシ［遇ノ上一字分空白］（京）―ナシ［此ノ下ニ補入ノ○印］（神）―ナシ［此ノ上下ニ補入ノ○印、脱字ト傍書］（山、賀）　38，惑―感（京、祐）　39，峻―嵕（島）―嵕［ミセケチシテ峻ト傍書］（内）　40，隠―陰（京）　41，諦―請（鶴）　42，止―心（内）　43，遇―過（祐、山、神、賀、鶴）―ナシ（島）　44，攀―挙［ミセケチシテ攀ト傍書］（内）　45，管―筆（鶴）　46，聞―開［ミセケチシテ聞ト傍書］（静）　47，鷲―ナシ（陽、祐、山、神、賀、鶴）―ナシ［一字分空白］（京）　48，詩―侍（京）　49，讃―謨（内、島）　50，甘―耳（鶴）　51，珠―蛛（鶴）

【押　韻】

○○○××○◎（下平声覃韻）　○××○××◎（下平声覃韻　談同用）
×××○○××　○○○××○◎（下平声覃韻）
×○××○○×　××○○××◎（下平声覃韻）
○××○○××　×○××××○◎（下平声談韻）
○○××○○×　○××○××◎（下平声覃韻）
××○○○××　×○○××○◎（下平声談韻）
○○××○○×　××××○××◎（下平声談韻）
○××○○××　○○○××○◎（下平声談韻）

【製作年代】

詩序中の「時也十月余閏」「翰林主人」から、匡衡が文章博士となった永祚元年（九八九）以降の閏十月があった年、すなわち正暦四年（九九三）の閏十月と推定される。

【語　釈】

◎天台＝叡山、比叡山。天台宗延暦寺。叡山。平安朝文人と叡山の関係については後藤昭雄『平安朝文人志』（吉川弘文館　一九九三年）『天台仏教と平安朝文人』（吉川弘文館　二〇〇二年）、等に詳しい。

◎員外藤納言＝権納言藤原某。『公卿補任』によれば正暦四年の権大納言は二十八歳の藤原道長と二十歳の藤原伊周の二人。匡衡との関係を考えれば、本詩序の員外藤納言は藤原道長であろう。

◎奇秀＝珍しくてすぐれているさま。冒頭から「譏漢武之求神仙」までは孫綽「遊天台山賦序」の冒頭部分に拠るところが大きい。「天台山者、蓋山嶽之神秀者也。渉海則有方丈蓬莱、登陸則有四明天台、皆玄聖之所遊化、霊仙之所窟宅」（『文選』巻十一（『芸文　類聚』巻七「山部上天台山」所収））

◎甲天下山＝「匡廬奇秀　甲天下山」（『白氏文集』一四七二「草堂記」）「天台山者　甲天下之山」（『本朝文粋』巻十「晩秋於天台山円明房月前閑談」大江以言）

◎名花異草＝美しい花と珍しい草。珍奇な草花。「此外奇巌怪石之千象万形、霊樹異草之　大隠無名」〈『本朝文粋』巻十「冬日於極楽寺禅房同賦落葉声如雨」慶滋保胤〉

◎佛種＝仏となる種子「下佛種子於衆生田、生正覚芽」〈『旧華厳経』三十二〉「三十七聖濡足本誓、一乗甘露灌頂佛種」〈『性霊集』八巻「為弟子僧真境設亡考七七斎願文」〉

◎香象＝身体が青みを帯び香風を出す象。菩薩の比喩。「青香象也、身出香風、菩薩身香風、亦如此也」〈『維摩経註』〉「積水浮香象、深山鳴白鶏」〈「和宋中丞夏日遊福賢観天長寺」王維〉

◎白牛＝白い牛。法華経で一乗の教えに喩える。「駕以白牛、膚色充潔」〈『法華経』譬喩品〉「何謀能救、憑白毫之照明　何善能通、仰白牛之引導」〈『本朝文粋』巻十三「朱雀　院被修御八講願文」大江朝綱〉

◎法輪＝仏の教え。古代インドの武器である輪が敵を倒すように、仏の教えが邪悪なもの、煩悩をうち破ることから言う。「転法輪」は仏の教えの輪を回すこと、すなわち仏の教えを広めること。「転不退転法輪、供養無量百千諸仏、於諸仏所、殖衆徳本」〈『法華経』序品〉「我有本願、願以今生世俗文字之業、狂言綺語之過、転為将来世世讃仏乗之因、転法輪之縁也」〈『白氏文集』「香山寺白氏洛中集記」〈『和漢朗詠集』巻下仏事にも「過」を「誤」に「転」を「翻」、「将来」を「当来」として出〉〉

◎巌扃有道＝巌扃は巌に作った戸。岩戸に同じ。比叡山の僧坊をいう。

◎大湖＝大きな湖、琵琶湖を指す。「水国追涼到　乗舟泛大湖」〈『文華秀麗集』「夏日臨泛大湖」嵯峨天皇〉

◎水鏡無私＝琵琶湖の水が澄んでいて鏡のようで全てを偏り無く照らしだすことをいう。「水鏡所以能窮物無怨者、以其無私也」〈『蜀志』「李厳伝」〉

◎清顔＝清らかな顔、琵琶湖の水面をいう。

◎類周文之遇師父＝周の文王が渭水のほとりで釣りをしていた太公望呂尚に出会い、師とした故事をいう。『蒙求』「呂望非熊」としても知られる「於是周西伯猟。果遇大公於渭之陽。与語大説曰、自吾先君大公曰、当有聖人適周。周以興。子真是邪。吾大公望子久矣。故号之曰太公望。載与俱帰、立為師。……文王崩、武王即位。九年、欲修文王業、東伐以観諸侯集否。師行。師尚父左杖黄鉞、右把白旄」〈『史記』「斉大公世家」〉「六韜曰、周文王下畋。史扁為卜地曰、所獲非羆非熊、乃天遺汝師。文王乃斎戒七日、畋于渭浜之陽。果卒見呂望坐茅釣。与論道徳、遂戴而帰」〈国立故宮博物館蔵『蒙求』上巻古鈔本〉

◎浪迹＝本来、あとをくらますこと、流浪することをいうが、ここは波の音を言う。「浪迹同生死」〈『杜少陵詩集』「贈王二十四侍御契四十韻」〉は流浪の意。

◎譏漢武之求神仙＝漢の武帝が仙道に興味を持っていたことは『史記』「武帝本紀」にも記されるところであり、七月七日に西王母に招かれたことを記す『漢武内伝』などもあるが、武帝が海辺で神仙を求めたという故事については未詳。「太史公曰、余従巡祭天地諸神名山川而封禅

焉、入寿宮侍祠神語、究観方士祠官之言。於是、退而論次自古以来用事於鬼神者、具見其表裏。後有君子、得以覧焉。至若俎豆珪幣之詳、献酬之礼、則有司存焉」〈『史記』武帝本紀〉

◎触石雲興＝山の気が石に触れると雲がわき起こる。「岡巒糾紛、触石興雲〔善曰……春秋元命苞曰、山有含精蔵雲、故触石而出也〕」〈『文選』巻四「蜀都賦」左思〉による修辞。

◎旱天霖雨之用＝旱魃の時に雨がふる如く、国の危機において適切に君主の補佐をすること。「若歳大旱、用汝為霖雨」〈『書経』説命上〉による。

◎含玉木潤＝叡山は玉を蔵した立派な山なので、木々は自然に潤う。『大戴礼』「玉在山而木潤」による修辞。「玉在山而木潤、川生珠而岸不枯、珠者陰中之陽也、故勝水、玉者陽中之陰也、故勝木」〈『芸文類聚』「宝玉部下」所収『大戴礼記』〉

◎任土貢＝その土地の産物を献上すること。「任土作貢」〈『書経』序〉

◎善根山＝善根は、果報を得る原因となる善行。善根山は善根が積まれてできた山、ここでは比叡山をいう。「不可以少善根福徳因縁、得生彼国」〈『仏説阿弥陀経』〉「善根苟種　仏果終成」〈『白氏文集』三六一四「衆生偈」〉「然則功徳海之中、忽求不死之薬、善根山之上、遙結菩提之果」〈『本朝文粋』巻五「請特蒙天恩被恤給度者四人状」大江朝綱〉ただし、朝綱の例は善根が山のように高大なことをいう比喩として使われており、比叡山の意味はない。

◎功徳院＝功徳は善行を積んだ果報、または果報を得るような善行そのものをいう。ここは比叡山の僧院をいう。

◎虎牙蟬冕＝虎牙は将軍の唐名、蟬冕は侍中の唐名。員外藤納言道長に付き従う武官、文官をいう。

◎逐日＝馬が太陽を追いかける勢いで速く走ること、駿馬。「修弥国有馬如龍。騰虚逐日」〈『洞冥記』〉

◎景従＝影のように付き従う。四「七言蔵暮於藤少候書斎守庚申同賦明月照積雪」の「影従」語釈参照。

◎鶴勒馬鳴＝鶴勒、馬鳴は二人とも印度の高僧。ここは比叡山の高僧たちをいう。

◎叩疑氷＝疑氷は夏の虫が冬の氷を知らずその存在を疑うように、無知のため真理を疑うこと。「近智以守見而不之。之者以路絶而莫暁。哂夏虫之疑氷。整軽翮而思矯〈『文選』巻十一「遊天台山賦」孫綽〉叩疑氷で無知から来る疑いを仏法の力で打ち壊すことをいう。

◎響応＝音に響きが応ずるように、即座に応ずる。四「七言歳暮於藤少候書斎守庚申同賦明月照積雪」の「響応」の語釈参照。

◎儒生＝儒教を学ぶ学者。儒者。

◎翰林主人＝文章博士の唐名。

◎避席＝坐を離れる。立ち上がる。敬意を表するための行動。「相如於是避席而起、逡巡而揖（李善注・孝経曰、曾子避席）」〈『文選』巻十三「雪賦」謝恵運〉「曾子避席曰、参弗敏、何足以知之乎」〈『孝経』開宗

明義章」第一〉

◎知己＝自分の真価を知ってそれにふさわしい待遇をしてくれる人。「士為知己者死、女為説己者容」〈『史記』「刺客列伝」〉「管仲曰、生我者父母、知我者鮑子也。士為知己者死、而況為之哀乎」〈『説苑』「復恩」〉

◎老尼山之雪＝尼山は孔子の異称。孔子はその母が尼山に祈って生まれたので名を丘といい、字を仲尼という。ここでは匡衡が頭に雪を頂くまで（白髪頭の老人になるまで）儒学を学んできたことをいう。

◎善縁＝仏道に進む因縁。藤納言が匡衡を比叡山訪問に喚び作詩を命じたこと。

◎攀台嶽之雲＝攀雲は高所に登ること。台嶽は天台山、すなわち比叡山。比叡山に登ることをいう。「嗟台嶽之所奇挺　寔神明之所扶持」〈『文選』巻十一「遊天台山賦」孫綽〉

◎不敢辞死＝自分を理解してくれる人のためなら死をも恐れない。「知己」の語釈参照。

◎況於詩乎＝死と詩の語呂合わせ。広韻によれば「死」は上声旨韻、「詩」は上平声之韻でまったく別の音である。したがって、中国の発音ではなく日本漢字音による語呂合わせである。「詩友独留真死友」〈『菅家後集』「詠楽天北窓三友詩」〉も同じく「死」と「詩」の語呂合わせの例。

◎台嶺＝台嶽に同じ。天台山、すなわち比叡山。「苟台嶺之可攀　亦何羨於層城」〈『文選』巻十一「遊天台山賦」孫綽〉

◎指南＝正しい方向を教えてくれる人、師匠。「習非而遂迷。幸見指南吾子」〈『文選』巻三「東京賦」張衡〉

◎進退＝進むことと退くこと。山道を迷いながら進むことと、朝廷に仕える身としての出処進退の意を重ね合わせる。「習蓼虫之忘辛　玩進退之惟谷（李善註・毛詩曰・人亦有言　進退惟谷）」〈『文選』巻六「魏都賦」左思〉「明友己譖　不胥以穀　人亦有言　進退惟谷」〈『詩経』大雅「桑柔」〉

◎升降＝上り下り。険しい山道を登り下りすることと、官人生活での好調、不遇の意を重ね合わせる。「人之弁降　与政隆替　杖信則莫不用情」〈『文選』巻十「征西賦」藩岳〉

◎世途＝世の中、世渡り。「人命有限　世途難抛」〈『本朝文粋』巻二「封事三箇条」菅原文時〉

◎隠士＝俗世を避けて暮らす人、僧侶。「杖策招隠士　荒塗横古今」〈『文選』巻二十二「招隠詩二首　其一」左思〉

◎寒温＝日ごろの生活ぶり。また生活ぶりをたずねること、挨拶。「爰悲妾衰邁、問妾寒温者、二三子之中、独佐時而已」〈『本朝文粋』巻六「為藤原明子請被停所帯爵令男右　少弁佐時加一階状」源順〉

◎近日＝序文中の「近白日」が示す、太陽に近づく、すなわち山に登る、の意と「近日」ここ数日の意を掛けるか。「同じ人（ゐしうといふ法師）に、ある人、『山へ登りたまふべき日は、まだ遠くやある、いつぞ』といへりければ、のぼりゆく山の雲居の遠ければ日もちかくなるものにぞ

ありけるとぞいひおこせたりける」〈『大和物語』第四　四段〉

◎掛冠＝冠を脱いで掛ける。職を辞すこと。「逢萌、字子康、北海都昌人也。家貧、給仕県為亭長。時尉行過亭。萌候迎拝謁。既而而擲楯歎曰、『大丈夫安為人役哉』遂去之長安学。通春秋経。時王莽殺其子宇。萌謂友人曰、『三綱絶矣。不去将及人』即解冠掛東都城門。帰将家属浮海、客於遼東」〈『後漢書』逸民列伝〉

◎縁母滞＝母が心配で職を辞して出家することができない。本詩が製作された正暦四年、匡衡の母は八十歳近い高齢で存命であった。→七「七言。秋夜陪右親衛員外亜相亭子守庚申同賦秋情月露深詩一首」の「未報母」の語釈参照。「母已八旬、悲禄養之猶遅」〈『本　朝文粋』「申弁官左右衛門権佐大学頭等状」大江匡衡〉

◎晦迹＝跡をくらます。隠遁すること、ここでは出家して俗世から離れること。「渭浜晦迹南陽臥　若比吾徒更寂寥」〈『全唐詩』「寄隠者」許渾〉

◎止水＝水が流れず澄んで、ものの姿を映せるように、心が動かず安定している状態。「仲尼曰、人莫鑑於流水、而鑑於止水。惟止能止衆止」〈『荘子』徳充符〉「我聞浮図教　中有解脱門　置心為止水　視身如浮雲」〈『白氏文集』四八四「自覚　又一首」〉「玉鏡沈　景与止水而可鑑　金波凝色　混細浪而難分」〈『本朝文粋』巻八「八月十五夜同賦映　池秋月明」三善清行〉

◎微塵＝細かな塵。取るに足らないものの喩え。「欲必無恒沙世界微塵数劫也」〈『顔氏家訓』帰心〉「云仏云経　計微塵劫以度脱　一香一色遍恒沙界以薫修」〈『本朝文粋』巻十三「為盲僧真救供養卒塔婆願文」大江匡衡〉

◎龍管駕＝諸本全て「管」だが、龍管は龍官の誤りか。龍官は大納言の唐名。駕は乗り物。

◎披霧＝霧を開く。迷いが晴れる。迷いを霧にたとえる例としては「業力妄霧翳心月以朦朧」〈『性霊集』巻七「為前清丹州亡妻達観」〉などがある。

◎鷲台談＝鷲台は霊鷲山のこと。釈迦が説法を行った地。ここでは比叡山の高僧たちが仏法を談ずることをいう。

◎言詩＝詩を作る。「学官弟子行雖不備、而至於大夫郎中掌故、以百数。言詩雖殊、多本　於申公」〈『史記』儒林列伝〉「強学言詩知是本　偸閑頭志愧為初」〈『菅家文草』巻一「近　以冬至書懐詩、奉呈田別駕……即又以本韻、重以呈之」〉

◎讃佛＝仏を讃美する。「願以今生世俗文字之業、狂言綺語之過、転為将来世世讃仏乗之因。転法輪之縁也」〈『白氏文集』三六〇八「香山寺白氏洛中集記」（『和漢朗詠集』巻　下仏事にも「過」を「誤」に「転」を「翻」、「将来」を「当来」として出）〉

◎露味甘＝仏の教えを甘露にたとえる。「世尊、我今身有調牛良田、除去株杭、唯悕如来　甘露法雨」〈『涅槃経』〉「菩提分種、将灑甘露於六趣之身田」〈『本朝文粋』巻十四「村　上天皇母后四十九日御願文」大江朝綱〉

◎恩煦＝暖かなめぐみ。

◎兼二世＝今生と来世にわたること。
◎珠繋＝数珠をまさぐる。

【通　釈】

七言　冬の日天台山に登った際に作る詩　藤権大納言の命に従う

天台山はくすしき山、天下の山に優っている。この山に生えるのは美しい花と珍奇な草、どれも仏性の種でないものはない。この山におわすのは菩薩行を修める高僧たち、法華経の教えで衆生の煩悩をうち破ってくださる。

比叡山は周りの山々よりひときわ高くそびえ立つ。しかし仏道を極める険しい山の僧坊にも道は通じている。

大いなる琵琶湖はこの山の眼下に広がる。鏡のように澄んだ湖面は僧侶たちの私心のない澄みきった心を映す。

霧が晴れて真っ青な湖面が見えるのは、あの周の文王が渭水のほとりで、師父と呼ばれた太公望呂尚に出会った故事を彷彿とさせる。湖面を渡る浪の音を聞けば、その昔漢の武帝が海の彼方に神仙を探させた故事を思いだし、その愚かさを譏るのである。

人の及びがたく鳥がわずかに通うだけの天に触れんばかりに高く険しい比叡山では、山腹の気が石に触れて雲がわき起こり日照りの空に恵みの雨を降らせる。また、山の奥深くに蔵された玉の存在が木々を潤し宮殿建築の材料を産出するのである。（それらはあたかも有能な臣下が君主の政を補佐するかのごとくである。）

かくの如き比叡山の徳を君子の徳に比べるとすれば、員外藤納言さまこそがふさわしいと言えよう。

このようなわけで、藤納言さまは同類を求めて善根の山比叡山にお登りになり、不退転の決意を持って功徳の院をお尋ねになる。率いていらっしゃるのは文武の両官、彼らは名馬にむち打って藤納言さまに従う。語り合うのは古の印度高僧にも比すべき高徳の僧侶たち、彼らは衆生の迷いをうち破ってくださる。藤納言さまが何度もこの地にご来訪になるのももっともなことである。

時は、閏の十月、辺りの景色はもの寂しくもすばらしい。

納言さまは一儒生たる私めにお命じになった。

「私には仏法の師や友がおり、これまで仏道を通じて交友を深めてきた。そなたは文章博士である。詩作によって仏を荘厳するがよい」

わたくし匡衡めは感激のあまり席から立ち上がり涙ながらに申し上げた。

「長年わたくしの実力を認めてくださる方にお会いしないまま、学問に励みいたずらに老いを重ねて参りました。しかしながら、本日藤納言さまという善き仏縁のおかげで比叡の山の高見に登ることができました。このご恩に報いるためには死をも恐れません。まして詩を作ることなど、何の躊躇がありましょうか」

このことを記録しなければ都には人材がいないといわれてしまうでしょう

と述べる次第です。

比叡の山を尋ね雲の高みにまで登る
この地に来るにあたって時機にかない指導者に巡り会った
比叡山に登るその道は深い谷に臨み、行く者は目が眩み魂も迷う
山の上り下りは険しい道が続きとても耐えられそうにない
（栄達への道は深く険しく、魂は迷い耐えられない思いがする）
身過ぎ世過ぎの善し悪しは年を取るに従ってはっきりわかってきたし
出家者の生活ぶりはここ数日比叡山の高みに登って覚えた（出家の心づもりはできた）
（そういうわけで）いつも職を辞そうと考えているけれど、母のことを考えると決心も鈍る
いまだ世を捨てることもできず、他人様に顔向けできない思いだ
（しかし今）心は静まり返った水のようにただ月（仏）を仰ぎ見ている
わが身は塵のようなものだが嵐を恐れたりはしない
それは偶然にも雲に登る龍管の車にも等しい藤納言さまのお引き立てを得
幸いにも煩悩の霧を払う仏の教えを聞くことができた
詩を作り仏をたたえればあたりの風景は冴え冴えと見え
仏法を感得し僧侶を礼拝すれば仏の教えは滋味深く感じられる
藤納言さまのご恩顧が今生と来世の二世にわたるとはどうして考えられよう（しかし仏縁が結んでくれたわれわれの関係は二世にわたるのである）
数珠をまさぐり仏を讃えれば法悦の境地はいつまでも続くのだ

（平成十四年五月十日受理）